

(様式5)

8 学校アクションプラン

令和4年度高岡南高校アクションプラン - 1 -	
重点項目	学習活動と進路支援
重点課題	学力伸長は日々の授業にあることを学校全体で共有し、生徒の実態に即した学習活動となるよう検討する。幅広い学力層に対応した作問・評価方法を工夫し、応用力の育成と基礎事項の定着をはかる。 面接週間以外にも時期を逃さず面接を行い、生徒の主体的な学びと自己実現を支援する。 タブレットを用いた学力判定ツールを用い、習熟度の理解に努める。
現 状	与えられた課題にはまじめに取り組もうとするが、学習活動自体が目的となっていることに無自覚な生徒が多い。将来を見据えて必要な事柄を選び取れる主体的な姿勢の育成が急務である。 また進路選択に際しては、自己の適性・能力をしっかりと認識できず、最終的には合格を第一として進路を考えがちである。
達成目標	(1) 個々の学習状況を踏まえた進路意識高揚のための面接指導を、各学年6回以上 (2) アンケート調査による学習活動への満足度80%以上
方 策	(1) 学期初めの面接週間に加え、生徒個々の現状に応じて随時面接指導にあたり、平日の家庭学習を、1年生2時間、2年生3時間、3年生の6月以降4時間を下限として確保できるよう支援する。 (2) 授業の予習・復習がおろそかにならないよう、学年と教科が連携を図り、自学課題の分量とレベルに配慮する。習熟度に応じた個別的な取り組みができるよう配慮する。 (3) 主体的な取り組みを促す評価方法を探究する。作問のあり方について、教科内で検討会を持ち、また結果を踏まえて総括を行う。 (4) 各学期末にアンケートを行い、達成度を検証する。 (5) 学力判定ツールの活用を図る。
達成度	・面接指導は、学期当初の面接週間と学期末を中心に丁寧に行われており、生徒アンケートの結果にも、ほとんどの生徒が満足していることがうかがわれる。 ・学習活動への満足度は高く、目標は達成できている。
具体的取り組み状況	・面接指導については、学校年間行事計画に明記され、定着しているものと思っている。 ・作問のあり方の検討については、全教科で取り組めたとはいえず、今後の課題である。 ・学期末アンケートをWeb上で実施しているが、保護者の回答率がなかなか向上しないので、工夫していきたい。今年度2学期末は準備していたものの諸事情により実施できなかった。例年、保護者には1・2学期しかアンケートを実施していないが、web上では来校いただくだけでも実施できるので、ぜひ実施して来年度につなげたい。 ・タブレットの活用は本校のあらゆる場面で行われているが、実力判定ツールについては、十分に活用できなかった点は反省される。
評 価	B 主体的な取り組みを促す作問のあり方と実力判定ツールの活用については、達成とは言い難く、次年度以降より綿密な計画立案必要である。生徒の進学への意識と気質の変化に柔軟に対応できる態勢づくりが必要である。
学校関係者の意見	作問のあり方検討について、全教科での取り組みとすることが挙げられている。高校自らの評価として、是非取り組まれることを願います。
次年度へ向けての課題	生徒の実態の把握に努め、生徒の学習活動がより効果のあるものになるよう検討と工夫を重ねていきたい。具体的には、校内及び外部模試を精選することで一層の学習事項の定着を図り、本校が期待されている進学実績につなげられるようにしていきたい。

() 評価基準 A : 達成した B : ほぼ達成した C : 現状維持 D : 現状より悪くなった

重点項目	学校生活	
重点課題	(1) 自主自律の精神に満ちた主体的に取り組む集団の育成 (2) 生活のリズムを整える食習慣の定着	
現 状	(1) 挨拶の励行、時間厳守、身だしなみの価値を心から意識して実践できている生徒はまだ少ない。 (2) 感染症予防への継続的な理解が必要であり、食習慣だけでなく、食事内容や生活習慣に改善すべきところがある。	
達成目標	(1) ①社会的なルール・マナーの意識向上 85% ②生徒意識調査による挨拶・時間・身だしなみに関わる意識率 90% (2) ①朝食を毎日とる習慣が身についている 90% ②感染症予防を心掛けて昼食をとっている 90%	
方 策	(1) ・生徒校紀委員会を中心に各クラス、学年の「行動指針」を策定し実践する。 ・「社会的なルール・マナー」についてのアンケートを実施し理解度を高める。 (2) 朝食を始めとした食習慣の実態を把握し、食事の重要性を理解するとともに、感染予防を意識した食事や生活習慣を考えさせる。	
達成度	(1) ①社会的なルール・マナーの意識向上 85% ②生徒意識調査による挨拶・時間・身だしなみに関わる意識率 90% (2) ①1年生においては、97%が朝食を毎日とっている。全体では 94% ②感染予防対策を「しっかり意識して」、「だいたい意識して」昼食をとっていると答えた生徒を合わせると、97.5%であった。	
これまでの具体的な取り組み状況	(1) ・新入生オリエンテーションで「マナーセンスアップ教室」を実施 (マナーについての意義・社会人としてのあり方について学ぶ) ・「社会的なルール・マナー」についてのアンケートを実施し共通理解度を高める。 ・生徒校紀委員会を中心に各クラスの「行動指針」策定。 ・6月、10月に「さわやか運動」実施。(PTA 役員、生徒会執行部、教職員) (2) ・新入生オリエンテーション時に朝食をとる必要性を啓蒙した。 11月の保健統一ホームルームでは管理栄養士を講師実施した朝食アンケートの評価と食事と栄養についての講座を開いた。 (3) ・各学期や行事の機会に昼食時の黙食の必要性について、感染予防上の有効な方法であることを説明し協力を呼びかけた。また、生徒会でも学校祭を迎えるにあたって黙食週間を設定して注意喚起を図った。	
評 価	A	生徒が自ら考え実践していく過程で、他を思いやる心や自律心を育むことに結びついた。
学校関係者の意見	生徒校紀委員会を中心に学年の「行動指針」を定め、自らが考え実践する心を育めたことは、素晴らしいことと思います。これからも、続けて欲しい。	
次年度へ向けての課題	(1) 南高校生らしい品格の概念の共有。生徒相互間のふれあいを深め、共生の心や人として望ましい品格の陶冶に努める。 (2) 引き続き食習慣を基本とした生活リズムを保つとともに、感染症に対して「うつらない」「うつさない」配慮を行いながら食事をとる。	

()評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった

重点項目	学校活性化	
重点課題	(1) 行事・部活動を通じて自ら創意工夫に努め、主体的に行動できる生徒の育成 (2) 読書活動の推進 (3) ホームルーム活動などを通じてのボランティア活動の推進	
現 状	(1) 昨年に引き続き学校行事・部活動が制約を受けるなかで、学校生活を意義あるものにするために、生徒一人ひとりのアイデアと主体的な姿勢が一層求められている。 (2) 図書の貸出し数は少しずつ増えてきている。(一人あたり R1 2.1冊、R2 2.4冊、R3 2.6冊) (3) 奉仕の精神に富む生徒が多く、ボランティア活動には意欲的である。	
達成目標	(1) 学校生活を意義あるものにするために、一人でも多くの生徒が工夫を凝らし、達成感と自らの成長を実感できることを目指す。 (2) 図書の総貸出数が年間1300冊以上になることを目指す。 (一人あたり約2.7冊) (3) 生徒一人ひとりがボランティア活動に年間一回以上参加する。	
方 策	(1) 生徒一人ひとりに対し、今年度の状況が、創造力と主体性を発揮する絶好の機会であると、ポジティブにとらえさせる。そのために、様々な場面で声かけと側面からサポートを心掛ける。 (2) ①学年と連携し、朝読書の時間を充実させる。(図書館から朝読書用の書籍を継続して選んでもらう。) ②授業や探究的活動で書籍を活用する。 ③POPカードや図書日より、校内掲示板など、広報に力を入れる。 (3) ホーム・ルーム活動等を利用し、各学年・クラス単位で校舎内外・戸出地区における清掃作業等のボランティア活動の企画・実施をすすめた。	
達成度	(1) 3年ぶりに合唱コンクールを実施した。体育大会、南高祭も含めて、それぞれの行事で生徒がアイデアを出し合い、新しい形の学校行事を目指して準備を進めた。(事後、達成感を得た生徒 合唱コンクール92% 体育大会95% 南高祭96%) (2) 2月3日現在で総貸出数は1,622冊(1人あたり 3.5冊) (3) 全クラスがホームルームの時間に戸出地域の清掃や校内美化活動を実施した。また、ボランティア委員が、地域の方々と一緒に清掃を行うなど、のべ484名の生徒がボランティア活動に参加した。	
これまでの具体的な取り組み状況	(1) 合唱コンクールでは、感染症対策を踏まえた新たなルール作りを話し合い、形にした。生徒の意見を尊重しながらも、教員も一緒になって協力して進め、他者とのコミュニケーションの中で主体性を育ていけるよう指導にあたった。 (2) ・ブックフェアの実施(貸出冊数無制限 貸出期間延長) ・掲示板による広報活動(職員室横廊下 生徒玄関) ・授業での書籍活用(総合など) (3) 後期ホームルーム計画の立案の段階で、ボランティア活動の実施を推奨し、計画に取り入れていただいた。	
評 価	A	学校活動において様々な制約を受ける中、生徒ひとりひとりが置かれている状況を理解しながら主体的に行動しようとする姿勢が見られた。
学校関係者の意見	コロナ禍で、学校活動の制約を受けるなか、逆にこれをバネとして、生徒がアイデアを出し合い体育大会、南高祭等の開催・運営に取り組みされたことは、生徒の自信、主体性の高まりに繋がり、高校生活のよい思い出になるであろう。	
次年度へ向けての課題	(1) コロナ禍での行事の計画にあたり、生徒は主体的行動の意義と前例に囚われない自由な発想を学ぶことができた。今後は、主体的に行事の企画・運営に取り組む姿勢を執行部だけでなく、全校生徒に波及するための方法を考えていく必要がある。 (2) 読書に触れる機会をさらに増やし、教養の涵養に努めたい。	

()評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:現状維持 D:現状より悪くなった

重点項目	SOUTH探究プロジェクト
重点課題	<p>(1) 「SOUTH探究プロジェクト」の充実発展を目指す。スクールポリシー「SOUTH」を実現するために、地域・大学・企業と連携し探究活動を行い、情報発信力や課題解決能力を育成することを目指す。</p> <p>(2) 新教育課程の実施による授業改善を行う。</p>
現 状	<p>(1) 「SOUTH探究プロジェクト」では、探究的な活動を行い、1学年では行政と連携し地域課題をテーマに探究の手法を学ばせている。2学年での大学連携により探究力・自己発信力の伸長が期待されている。加えて学びに向かう姿勢や高みを目指して挑戦する姿勢を高めるためにも、このプロジェクトを系統的に再編し、伸ばしたい力を計画的に育成する必要がある。</p> <p>(2) 互見授業などを活用し、各教科・学年の授業を参観する機会が増えてきたが、新教育課程の実施により更に互いに学び合う場を増やしたり、ICT機器を用いた教育を推進したりとさらに工夫する余地がある。</p>
達成目標	<p>(1) SOUTH探究プロジェクトを通じて、探究力・自己発信力が育成された生徒の割合80%</p> <p>(2) 互見授業の参観を3回以上実施する。教科別授業研究会を開催し、新教育課程で3年間を見通した指導法を築き、指導目標を共有する。</p>
方 策	<p>(1) 主に総合的な探究の時間を活用して実施する。</p> <p>①1学年 課題の設定や情報活用能力など探究リテラシーを身につけせる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企業訪問・・・「フィールド・スタディ」を実施する。 課題発見・課題解決方法について地域企業をテーマにして学ぶ。(前半) ・地域探究・・・高岡市と連携し、身近な地域を課題にして探究する。将来の社会とのかかわり方の視野を広げる。(後半) <p>②2学年</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学連携講座Ⅱ・・・富山大学と連携し、将来進む可能性のある学問分野に関係した研究活動等を体験する。仲間と協働しながら、課題を発見し解決していくための資質・能力を育成し、探究力・自己発信力を身につけさせる。(前半) ・イノベータープログラム・・・アントレプレナーシップ講座とグローバル講座を実施し、探究的に学び、自らの発信する力を養う。(後半) ・データサイエンス講座・・・大学連携講座Ⅱで培った探究リテラシーを更に発展させる為に実施予定。地元大学との連携を検討している。 以上によりコンピテンス基盤型教育を推進することができると考えている。 <p>③プロジェクトの評価と改善を行い、更に系統的に再編する取り組みを行い、伸ばしたい力について学校全体で共有をはかる。</p> <p>(2) 授業力の向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ①互見授業期間に各教科1名以上の指定公開授業を行う。ICT機器を使用した授業を行い、ICT教育を推進する。 ②他教科の授業を含めて、授業を3回以上参観する。 ③互見授業終了後、教科別授業研究会を開催し、3年間を見通した指導法を築き指導目標を共有するなどカリキュラム・マネジメントを行う。
達成度	<p>(1) SOUTH探究プロジェクトを通じて、探究力・自己発信力が育成された生徒の割合 (1学年) 91.6% (2学年) 90.8%</p> <p>(2) 互研授業参観回数 3.8回/人</p>

<p>これまでの具体的な取り組み状況</p>	<p>(1) SOUTH探究プロジェクトについて</p> <p>①【1学年】探究的な活動Ⅰ：企業訪問8/26に26事業所にわかれて実施した。「フィールドワーク」を実施し課題の設定等を学び、9/27にまとめて発表を行った。</p> <p>地域探究では、11/15に高岡市連携講座を実施、また12/6にはデータサイエンスを活用した課題解決力の向上を図る講演を実施するなど生徒の探究リテラシーの向上を図った。3/22には地域課題について探究した内容を発表する予定である。10/20にはキャリアデザイン講座を実施し将来の社会とのかかわり方の視野を広げることができた。1/24大学連携講座Ⅰをオンラインで実施し、生徒の学びに向かう力を育成した。</p> <p>②【2学年】探究的な活動Ⅱ（大学連携講座Ⅱ）：5/31に富山大学研究室訪問を行った。その後、7/12・8/26・11/1と3回に分けて富山大学の先生方に直接指導をして頂き、テーマ設定・情報活用能力・協働能力・課題解決力を身につけた。11/4に保護者に公開し、全体発表会をポスターセッション形式で実施し、自己発信力を身につけさせた。代表班は1/28に富山探究フォーラムにて発表をした。</p> <p>・12月より新規事業としてイノベータープログラム（アントレプレナーシップ講座・グローバル講座）を実施し、シリコンバレーと繋いで、デザイン思考やマインド・セットを身につけるとともに挑戦する力を涵養した。更に2月からは、富山大学と連携しデータサイエンス講座を開催した。内容としては「自己分析を客観的に行おう」として、探究力の更なる強化をはかった。</p> <p>(2) 授業力の向上</p> <p>9月2日の学校訪問では、授業者全員がICT機器を使用した授業を行い、ICT教育を推進した。「総合的な探究の時間」をはじめ他教科の授業の参観が多く見られた。教科別授業研究会では学習の評価方法について熱心に討論が行われた。</p>	
<p>評価</p>	<p>A</p>	<p>新規に企業訪問・イノベーター講座・データサイエンス講座を実施し、情報発信力や課題解決能力を高めることができた。</p>
<p>学校関係者の意見</p>	<p>「SOUTH探究プロジェクト」が、1、2学年とも、テーマを定め、地域・大学・起業とも連携し、スクールポリシーの実現に取り組まれることを期待します。また、プロジェクトの評価を学校全体の課題として、検討して欲しい。</p>	
<p>次年度へ向けての課題</p>	<p>「SOUTH探究プロジェクト」の推進について、プロジェクトの評価方法については早急に確立する必要がある。「GIGA スクール構想」を受けて、10年先を見据えての本事業の見直しも検討課題である。</p>	

()評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった

重点項目	ICT推進事業	
重点課題	教育クラウドを利用した教育活動の推進	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・ICT推進業務が一部の職員に偏っている。 ・1人1台タブレットの運用に関する研究が未達である。 ・「校務支援システム」の運用が開始され、全教職員の研修とルール作りが必要であり、新たな業務が発生する。 ・「ICT推進事業」(支援金)の運用が始まり、支出処理等が発生する。 	
達成目標	教育クラウドを利用した教育活動の推進工程の達成	
方 策	<ol style="list-style-type: none"> (1) ICT推進業務の分担 (2) 業務内容の整理とフォルダ構成の改善 (3) ガイドラインに沿った教育クラウド整備 (4) 1人1台タブレットの初期設定と運用に関する研究 (5) 教材のデジタル化によるID・PW管理 (6) 「校務支援システム」の運用 (7) 「ICT推進事業」(支援金)の管理・運用 	
達成度	<ol style="list-style-type: none"> (1) ICT推進業務の分担 =達成度A (2) 業務内容の整理とフォルダ構成の改善 =達成度A (3) ガイドラインに沿った教育クラウド整備 =達成度A (4) 1人1台タブレットの初期設定と運用に関する研究 =達成度B (5) 教材のデジタル化によるID・PW管理 =達成度B (6) 「校務支援システム」の運用 =未達 (7) 「ICT推進事業」(支援金)の管理・運用 =達成度A 	
これまでの具体的な取り組み状況	<p>(6) 「校務支援システム」の運用については、外部委託、支援を得て、前進しているが、まだ不十分な部分もあり、今後、さらなる研究と改善が必要である。</p> <p>(4) (5) タブレットの初期設定、ID・PWの管理・運用は、予想以上に仕事量が多い。本年度からの運用となる教科書会社、問題集出版社等も多く、現状では、業務分担、業務内容、リストの管理、設定方針等、改善すべきと思われる点が複数あり、整理が必要である。</p> <p>ただ、本校のみで改善できる内容ばかりでなく、各業者様のシステムによるところもあるので、連絡を取りながら、次年度当初の実施に向けて取り組んでいきたいと考えている。</p>	
評 価	A	概ね、本年度の解決すべき課題は、改善された。
学校関係者の意見	ICT推進業務が一部の職員に偏っている現状分析があり、取り組み過程にはたくさんの課題があるようです。課題解決に向け、着実に取り組みが進むことを期待します。	
次年度へ向けての課題	多岐にわたる業務を部員間で分担することができたが、次年度は、複数の業務をこなせるような工夫が必要と思われる。ただ、「校務支援システム」は、まだまだ運用のノウハウを貯めている途上であり、来年度以降も継続して取り組むべき長期的な課題と考えている。	

()評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：現状維持 D：現状より悪くなった

